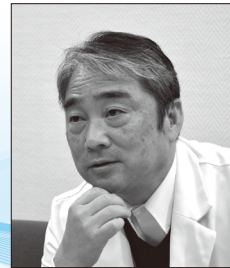


医師1人体制から19年かけて医師10人の医局に チーム制を確立し県内の血液疾患の7割に対応

高知県・高知市病院企業団立高知医療センター 医療局長 血液内科・輸血科 今井 利



「地域医療探訪」では、市中病院の血液内科がそれぞれの地域で担う役割や取り組みについて紹介します。第6回は、高知県・高知市病院企業団立高知医療センター（高知医療センター）血液内科の今井利先生にお話をうかがいました。同センターは地域中核病院であり、血液内科では県内最多の造血幹細胞移植の実績を継続しています。現在の血液内科の医師は10名と大学病院と同等の陣容を誇り、多くの患者の診療を行いつつ、ワークライフバランスに配慮した診療体制を整えています。

病院概要

名 称：高知県・高知市病院企業団立高知医療センター（略称：高知医療センター）

所在地：高知県高知市池2125番地1

開設年：平成17年（2005年）

診療科目数：40科

病床数：620床（一般548床、精神44床、結核20床、感染症8床）

高知県立中央病院と高知市立市民病院の統合整備により、平成17年に開設。高知県および高知市を構成団体とする自治体病院で、総合周産期母子医療センター、救命救急医療、がん医療、こころのサポート、循環器病医療、地域医療連携などを充実させ、地域において「なくてはならない病院」を目指している。

県立病院と市立病院が2005年に統合される 2007年から1年8カ月の1人科長体制で苦労

高知医療センターの前身は、高知県立中央病院と高知市立市民病院です。高知県立中央病院は昭和23年（1948年）5月1日の開設で、地域がん診療拠点病院、臨床研修拠点病院、救急病院などの機能を持っていました。一方、高知市立市民病院は、明治26年（1893年）に市立伝染病隔離病舎として開設、1950年に高知市立市民病院と改称し、救急病院、開放型病院として医療を提供してきました。しかし、医療に対するニーズが多様化・高度化する中、両病院ともに施設の老朽化が進み、十分な広さも確保できなくなりました。そこで、両病院を統合整備し、スケールメリットを生かして充実した診療機能を発揮し、同時に医療資源の効率的な活用を目指すことになりました。そして2005年3月に高知県・高知市病院企業団立高知医療センターとして開院しました。

私は統合準備が始まった2003年に高知県立中央病院の血液内科医長として、岡山大学から派遣されました。岡山大学を1995年に卒業し、岡山大学第二内科に入局後、関連病院での初期研修を終え、血液内科医として大学病院や県内の病院に勤務しました。その後、大学病院で研究にも従事しましたが、こちらはさしたる成果は上げられませんでした。

した。

2005年に高知県立中央病院の医長からスライドする形で、高知医療センター血液内科の医長となり、新病院では高知県立中央病院の上司だった医師と2人で診療を開始しました。ところがその医師が退職することとなり、私は2007年から1人医長として血液内科の診療を担当することになりました。昼も夜も休みの日も、ずっと働きました。働き方改革が進む今からは想像できないと思いますが、1年8カ月、きつい時代を過ごしました。

この話をすると、ほとんどの人に「よく頑張ったね」と言われます。私もそう思います。「断らない医療」の大切さが身にしみたと同時に、医師の体と心の安定のためには休息が必要だと痛感しました。そのときの経験から、断らない医療を実現しつつ、医師が十分な休みを取れる体制を目指してきました。

外来患者300人以上、入院患者は60～70人 臍帯血、ハプロなどすべての移植に対応

その後、高知大学から医師を1人派遣頂きました。ただ、期間が限られていたこともあり、その後、当院に赴任した町田拓哉先生と本格的にリクルートを始めました。まず、高知県出身の自治医科大学の研修医に対して、担当医（研

修医)＋主治医という診療体制を組みました。1～2カ月の研修ですが、診断から治療まで担当する総合診療的な内容としました。これを継続した結果、専攻医として当科に戻ってくる医師が少しずつ増えてきました。現在、当科の診療の中軸を担っています。

学会などの機会には、研修医に当院への就職を働きかけました。2014年に沖縄で開催された第36回日本造血細胞移植学会では、医局を挙げて現地で研修医との交流をしました。今では、医局員が自ら、いろいろな学会や研究会で若手医師と積極的に交流して働きかけるようになりました。

こうした地道なリクルートと並行して、当科勤務医には岡山大学第二内科(血液・腫瘍・呼吸器内科)の大学院に入学して研究生生活を経験するよう勧めています。私としては、初期研修を終えて専攻医となった医師を、少しでも早く大学院に送りたいと思うのですが、岡山大学の前田嘉信先生からは「入局、大学院進学は急がなくてよい」と言われています。一方で、岡山大学から当院に勤務する医師も増えています。

こうした地道な努力の積み重ねで、次第に医師数は増加し、2026年4月現在常勤医8人、専攻医2人という体制になりました。陣容が整い、患者数は増加を続けています。2024年の外来新規患者数は316人で、ここ数年は300人を超えています。入院患者は60～70人で推移しています。

造血幹細胞移植の実施体制も整えました。現在当院は、日本血液学会研修認定施設(高知県内2施設)であり、日本造血・免疫細胞療法学会移植施設認定(カテゴリー1)を取得しています。また、非血縁者間造血幹細胞移植・採取認定施設にもなっています。無菌室はISOクラス7を4床、クラス6を7床、クラス5を2床備えています。造血幹細胞移植は年間25件前後、造血幹細胞採取件数は20件前後です。

骨髄移植、末梢血幹細胞移植、臍帯血移植、HLA半合致移植など、すべてのリソースでの移植が可能となり、県外の高度専門施設に患者さんを紹介することはほぼなくなりました。

土日はチーム内で誰かが休みを取れる形に大学の地域枠などを活用した専門医育成も

当院血液内科は県内の血液疾患の6～7割に対応し、移植件数は四国トップクラスとなりました。一方で、私の長年の課題である医師の休息についても取り組んできました。その核となるのがチーム制です。現在、医師5人ずつの2チーム制を編成しており、それぞれのチームで複数の患者さんに対応する体制で、全ての医師が土日のどちらかは必ず休むようにしています。

そのためには、患者さんたちの状況を細かく観察し、看護師らも交えて常に対応を考える必要があります。例えば子育て中の女性医師の場合は、勤務時間は月曜から金曜の9時～16時としています。それ以外の時間の対応、土日の対応については、チームのメンバーだけでなく、他のチームのメンバーも一緒に考え、柔軟に対応しています。

チーム制は、医師一人ひとりが自ら考え判断するという日常診療の礎になっています。当院は日ごろから県内からの紹介患者が多いのですが、往々にして金曜日の夕方に来ることがあります。スタッフは「高知ではこしか対応できないよね」と、土日の休みをチーム間で調整し、受け入れています。「断らない医療」の実践が続いていると考えています。

働き方改革も見すえ、休息できる環境を整えてきた結果、それが口コミで広がり、新たな医師のリクルートにもつながってきました。ただ、これらは医師数が安定してきたことから実現できたことですが、血液内科専門医は全国的に不足しており、こうした水準を今後も維持するには若手医師を含む医師数の確保が重要で、当院でも常に大きな課題として取り組んでいます。

特に研修医については、「血液内科専門医を目指すプログラム」を2025年に策定しました。これは、医学部卒業後9年で血液内科専門医の取得を後押することを目標とし、奨学金や地域枠による研修医(初期・後期)の県内勤務義務を緩和するものです。

奨学金を貸与された場合は、高知県内の指定医療機関で勤務する義務が生じ、義務期間中は、地域の医師不足病院などに派遣されます。また、地域枠で高知大学に入学した医師は、初期臨床研修終了後に一定期間の県内勤務義務があり、そのうち数年間は高知市や南国市以外の地方医療機関での勤務が必須となることがあります。

高知医療センターの新たな「内科基本領域+血液サブスペシヤリティ連動プログラム」では、例えば高知県下での2年間の初期研修のあと、1年間、内科専攻医として高知県立幡多けんみん病院(宿毛市)や土佐市立土佐市民病院(土佐市)など県内病院に勤務し、卒後4年目から当院の血液内科専門医プログラムに入ります(内科との連動研修)。当院の血液内科は高知県の「特定科目県内医療機関」に認められており、当科勤務中は上限なく勤務義務期間(奨学金償還免除期間)にカウントされます。すなわち、最短で内科専門医は医師6年目で、血液専門医は7年目で取得可能で、勤務義務履行も最短で9年間で終了できます。プログラムは始まったばかりで、今後の成果を見守りたいと思います。

医局員の教育も重要な課題です。特にCAR-T細胞療法、二重特異性抗体など、新規治療が次々と登場し、それらの知

識を吸収し、臨床に生かすことが求められています。カンファレンスは医師と検査技師による新患カンファレンス、医師による移植カンファレンス、多職種による移植カンファレンスを毎週実施し、医師とコメディカルスタッフが新規治療を学ぶ場にもなっています。

抄読会も2週間に1回開いています。国内外の論文に接する機会は、医師の情報アップデートに必須です。また、論文作成の経験が豊富な医師による論文執筆指導や、学会発表の経験が多い医師による予演の指導など、若手医師の教育には、医局全体が取り組んでいます。

今後も高知の血液疾患診療の中核施設を担う人材の確保と育成を続けていきます。